

## 第2回松本市中央図書館あり方検討委員会 議事録

日時：令和2年9月24日（木）13：30～17：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

### 【出席者】

伊東委員長、菊地副委員長、森委員、森田委員、吉成委員  
(事務局) 瀧澤中央図書館長、羽田野館長補佐、町田館長補佐、栗田館長補佐、  
百瀬主査、内山主査、丸山（和）主事

### 【議事録】

#### 1 開会

瀧澤館長：

第2回松本市図書館あり方検討会を開催させていただきます。本日もお忙しいなか、お集まりいただき、ありがとうございます。本日は、お手元の次第に沿った議事進行になります。

伊東委員長、お願いいたします。

#### 2 議題

##### (1) 職員ワークショップの報告

伊東委員長：

それではみなさん、よろしく申し上げます。

前回、初めての顔合わせでみなさんにいろいろお話ししていただいたことを、もう一歩先に進めていきたい。前回、松本市の図書館職員の考え方を知りたいという話が出た。ワークショップをやってみてはどうかというアイデアは出たものの、どんなやり方をするのかは、吉成委員が岐阜市でされたような手法を参考に、事務局に考えてもらうということで会議が終わっていた。

まずは、ワークショップについての説明を受け、次回に向けての話をするという進行にしたい。

昨年12月に行われた図書館職員によるワークショップで出されたキーワードのリストを改めて職員に示して、大事だと思うものに順位付けしたものを事務局で集計するというような作業をしてもらった。もうひとつは、そのまとめを受けて、ここにいる事務局の職員にワークショップをやってもらい、私がファシリテーターを務めた。お手元の資料にはそのときに模造紙に貼られた意見・アイデアをそのまま書き込んでもらってある。

この2つについて、事務局から報告をお願いしたい。

事務局（町田）：

資料1から9についてご説明します。

資料1は、第1回の委員会でお示したワークショップの資料をもう少し絞り込むために図書館職員全員に配布した調査票です。この調査票で、ワークショップで出た項目に順位付けをしてもらい、集計したものが資料2です。

資料2は、上の段が「図書館にとって一番大事なもの」への1番、2番の順位付けで、下の段が「図書館にとって一番大事なサービス」に1～3番の順位付けをしたもので、1位の2番目までに緑色の網掛けを、2位の2番目までに黄色の網掛けをして強調表示をしてあります。番号だ

けだとわかりにくいため、資料3と4に項目名と一緒に表示しました。

資料3は「図書館にとって一番大事なもの」で、1位が「知る・学びを支える」から選ばれ、資料4は「図書館にとって一番大事なサービス」で、1位は「資料の充実」から選ばれました。資料5は、集計結果を体系別にグラフ化したものです。

資料6は、松本市と松本図書館の強みと弱みを挙げてもらい、抽象的な言葉として集計したものです。また資料7・8は、「先進事例、あるいはいいなと思う図書館」をそう思う理由とともに挙げてもらったものです。

資料9は、調査票であがった松本市及び松本市図書館の強みと弱みもとに、先日、伊東委員長にファシリテーターを務めていただいたワークショップで、SWOT表に落とし込みしたものです。なお、ワークショップで作成した模造紙は、会場に掲示してあります。

また本日追加でお配りした資料は、前回報告したアンケート調査の自由記述を年代別に分けて傾向を探ったものです。一番利用する館が中央図書館、一番利用する館が分館、松本市職員の3つの区分で年代別にして、膨大な量だが、すべてを表示しました。一番利用する館が中央図書館という方からは、全体的な意見があがっているようであり、一番利用する館が分館という方からは分館への要望が、市の職員からは図書館を利用していない方からの回答もあり、それぞれの特徴があるようなので、参考にさせていただければと思います。

**伊東委員長：**

ありがとうございました。資料の内容が細かく量も多いので目を通す時間も厳しかったと思いますが、これを今日、どうこうするというのではなく、今後、何か吸い上げていけるような参考資料として使っていけるのではないかという気はしている。今の説明のなかで皆さんからのご意見、感想、質問があれば出していただきたい。

**菊地委員：**

ワークショップの調査票について。調査項目の1番、2番の「図書館にとって一番大事なもの」と「一番大事なサービス」という選択肢は、どなたがどういう意図でその選択肢を設定したのかということと、3番と4番の回答は自由記述で、みなさんに書いてもらった結果、資料6の回答になったという解釈でよいか。

**事務局（町田）：**

「図書館にとって一番大事なもの」と「一番大事なサービス」の選択肢は、昨年12月のワークショップで作成したリストから選んでもらうことにした。

自由記述の回答については、「自然」「環境」「文化」といった抽象的な文言でまとめたが、個々の回答は「山が多い自然」というように書き込まれている。

**菊地委員：**

分かりました。

**伊東委員長：**

今回の資料は、前回の「この委員会で何を話すのか、検討するのか」という大命題からきている作業を実際にやって、まとめてもらったもの。誤解を受けやすい言い方になってしまうが、私たちが依頼されて検討すれば、「検討委員会」になるので、この作業がなくても委員会はできてしまう。しかし、そういうことだと「委員会」だけで終わってしまいがちなので、やはり職員に関わってほ

しいという思いがある。12月のワークショップ自体は、この委員会を作るという話が出るよりも前から始まっている作業なので、図書館を少しでも良くしていこうとする取組みの一環であるという位置づけからすると、個人的には、今、この委員会ができたことを追い風にして、しっかり取り組んでもらえばいいと思った。こうしたことを何らかの形でやってもらい、かつ、続けてほしい。

先日の、事務局の職員によるワークショップは、図書館の強みを生かして地域の強みを強化するために図書館に何ができるのかという提案を、これから繰り返していく作業のひとつのステップとして位置づけてもらえればと思う。

みなさんから、何か感じたことがあれば出してほしい。

**森委員：**

「知る・学びを支える」のが図書館にとって一番大事だという職員が圧倒的に多いが、抽象的というか、理念というようなレベルのことだと思う。実際に、「知る・学びを支える」図書館はどういう図書館なのかをどの辺まで具体的にしていくのか。資料3の「知る・学びを支える」の列には具体的なことと抽象的なことが混じっている。この検討委員会はものすごく先の、何十年、百年くらいのスパンで理念的なことを考えていくのか、あるいは、「5年後にここを改修します」という話になったときに、改修された図書館にどんな機能を持たせるかというスパンで考えるのか。初回の委員会で話題になったことだが、我々委員会はどのくらいまで視野に置いていくことを求められているのかが気になる。

**伊東委員長：**

次回以降の組み立てを考えると、まさに前回からの課題になっているところなので、議題の「次回に向けて」で話していきたいと思う。

## (2) 次回に向けて

**伊東委員長：**

ワークショップの集計結果のことで特になければ、次回に向けての話題に入っていきたい。

**森田委員：**

事務局職員へ。順番をつけなくてもいいが、3つくらい選ぶとすれば何をしたいか。どういう風に変りたいとか、何ができたらいいとか。ワークショップのリストにはいろいろあるが、本質的なことで何かないか。

ここに集まっているのは、何かの目的のために集まっている。今までのことは今までどおりやっていけばいいが、希望として我々は何を持とうとするのか。

ここでは役職も関係ない。フラットな場として話してほしい。

**事務局（羽田野）：**

先日のワークショップで、今の図書館は資料の貸出等、図書館の中で収まっていて、市の政策や市全体への貢献はしてないと感じた。そこはすごく大事なところだと思うのだが。

**森田委員：**

市政？

**事務局（羽田野）：**

図書館を利用していない人も含めての「市」。そちらへの取り組みはないと思った。

森田委員：

もっと簡単に言えば、「来てほしい」ということですか？

事務局（羽田野）：

もっと来てほしい。来なくても使ってほしい。

森田委員：

「利用してほしい」と。

事務局（羽田野）：

はい。

森田委員：

利用しなければね、蔵書の数にはなんの意味もない。

事務局（内山）：

今、来る人が固定化しているので、図書館に興味がない人でも「図書館は楽しい」というイメージを持てる図書館になったらいいと思う。

森田委員：

その代償として、館内がうるさくなったり、本の順番に関係なく書架に入れてしまう人がでてくることがあるが、それは大丈夫ですか。

事務局（内山）：

今の図書館に興味がない人は、新しい魅力がないと呼び込めないのです。

森田委員：

代償になる部分は、乗り越えたいと。

事務局（内山）：

はい。

事務局（栗田）：

図書館にはこの4月に配属されたばかりだが、公民館の現場をいくつか経験してきた。その観点から見ると、図書館は全然、知られていないのだと、改めて思った。

松本市35地区の全てに公民館があり、図書館は11館ある。それぞれの地区で困ったことがあれば、図書館に頼れることは多いのではないかと感じるようになったが、私が公民館にいた頃は図書館に「何かいい本ない？」というような相談をしてみるという発想はなかった。市内の公民館職員が集まる研修会でも、そんな話題は出なかったように思う。

そういう状況は、図書館を知ってもらっただけで変わっていくと思うので、是非、やっていきたい。

森田委員：

「強みと弱み」に「11館ある」と書いてある。これは強みなのか弱みなのかよく分からないが、僕は適正ではないかと思っている。「知られる」ということは、ランチがいっぱいあればいいということではないので。

**事務局（栗田）：**

頼る側が知らないというのが現状。例えば寿台図書館は4つくらいの地区が頼って行ける立地にある。市内の35カ所に分散している地域づくりの拠点が「ウチの地区ならこの図書館に行けるね」というような認識を持ってもらえるようになればいいと思っている。

**伊東委員長：**

「11館ある」という話は出ると思っていた。先日のワークショップで「11館しかない」というコメントを出したのは私。平成の大合併の時点で図書館がない村があって、今もない地区もあるので、その地域の図書館環境は全く変わっていない。それを良しとするのか。そういう目線も必要だと思ったので、投げかけの意味で敢えて「弱み」に出してみた部分ではある。

12月のワークショップの集計にも現れているが、「知る・学びを支える」を8割が1位に挙げており、「多様なサービスの充実」も3割くらいが挙げているのに、医療情報とかビジネス情報、法情報という辺りになると、誰一人そこにのってきていない。レファレンスが大事だという声があるものの、具体的なサービスのイメージがないというような図書館の実情をあぶりだした資料にもなったように思う。

**伊東委員長：**

他に意見等がありますか？

**森委員：**

先ほど、公民館のいろいろな課題があったとき、図書館にアドバイスを求めれば解決できるのではないかという話があったが、そこは繋がるのではないか。しかし、実際に相談にきたときに受けられるのかということはある。その図書館が地域の課題解決につながる資料を提供できるだけの力を蓄えなければいけない。最初のうちは準備が整っていないところから始まるので、一緒に育ててもらえるくらいの気持ちでやっていかなければいけないと思う。「準備ができていないからやりません」ということはできないと思うので、問いかけをもらえればがんばれるし、がんばれば次のつながりができるものだと思う。

図書館が本質的にどうあるべきかということころは、相手とか社会があってこそ。資料を整えることは当然だが、今は出会いの場、学びの場といった場づくりに軸足が移りつつある。図書館にその機能を取り込むことによって、そこに住んでいる人たちにとって幸せなことができるのだとすれば、公民館活動が盛んな松本市では図書館と公民館が組んで、図書館は知の拠点として情報・資料の提供をやっていくという風に位置づけるという関係性が必要なのではないかと思う。

「11館もある」のか、「11館しかない」のかということも、大合併の前に図書館がなかった地域にはやはり図書館を作りましょうということなのか、既存のその地域に既にある社会教育に情報を届けるということによってやっていくのかというようなこともトータルで考えられたらいいのではないか。

「デジタル」ということが臥雲市長の公約にもあるということだが、「デジタルがあればリアルはなくてもいい」ということでは決してない。我々の世代から30年くらいはハイブリッドでいかなければいけないと思うので、そういうようなことも突っ込んで話していただければいいと思う。

「知る・学びを支える」とか、拠点になるということは、今あるリソースのなかでどうやっていけばトータルで幸せになれるかということ。それに対して「松本市はこうだ！」というのをSWOT分析でやっていただいたことをもっと突っ込んで考えていけるといいのかなあと、思う。

**伊東委員長：**

SWOT分析のなかの「松本市の弱み強み」は、市の職員のワークショップでは「市」イコール「市役所」という捉え方からの発想になりがち。もっと広くとらえていいと言いながらファシリテーションをしていたが、限られた背景のメンバーでは難しいと感じながらやっていた。このワークショップに関しては、あくまで図書館の傾向として見ていただければいいと思う。

**森田委員：**

僕はどんどん思いついて実践する派。先ほどの「知られていない」とか「役に立ちたい」ということを、これからやってみませんか。

前回、私たちが御用聞きをやったという話をしたが、松本市役所のある部署、例えば水道局に行って「役に立つ本をチョイスしたいので、今、どんな風なことがあるのか聞かせてください」と聞きに行って、それに対応するブックリストをとにかく作ってしまう。それを実際に持って行って、「こんなものもあります」と言ってみて、その反応を聞くということを始めましたと、プレスにも言って記事にする、ということ。

それをやるためのお金を、例えば市長さんに「50万円ください」と言ってみる。50万円はちょうどいい金額で、50万円あれば、いろいろな冊子を刷れる。もちろん、職員のみなさんの動きが必要になりますが。その50万円、「そんなんでいいのか」と、多分、市長さんは言うだろうが、「50万円でやります。がんばります」とみんなで言う。そして、やる。それが大事なことです。

**吉成委員：**

転がして見せるのはすごく大事だと思う。

僕が今いるメディアコスモスは、図書館には基本的にお金がついている。だけど、それ以外のところにはついていない。オープンから5年経つと、追加的な予算はなかなかつかないので、「じゃあ、どうする？」って。予算がつくのを待ってはられない。それで、プロジェクトチームを作って、ユーチューブチャンネルを月2本、強制的に2本は絶対に作ろうと決めた。その代わり、「やり方は全部任せるから」と言ってみて、今、職員が作っている。それが5作目になったが、やはり、かなり面白いものができあがっていて、職員の目が輝きだしている。

それから広報紙は手づくり。予算はゼロ。印刷費でプリント代を払っているもの以外は全部手づくりでやっている。アポ取りから取材まで全て職員がやるが、それをもう、とにかくやってみせる。財政を通して来年の予算が編成されるまで待たないということが大切だ。

**森田委員：**

うん。

**吉成委員：**

今の話は全く同じ。やってみせなければ動かないのでね。何もね。

**森委員：**

それをメディアに露出させることで、図書館に注目が集まる。「あ、今まで図書館って読書が趣味の人だけが行く特別な所だと思っていたけど、市民に関係あるんだ」と気づいてもらえる。

**吉成委員：**

広報は外側に対するだけのものじゃなく、内側に広報する意味でも非常に重要。

森田委員：

そのとおり。

伊東委員長：

他にいかがでしょうか。

吉成委員：

今みたいな話を聞いていて「やれそう」とか「公民館へ行っちゃおうか」「介護関係のリストを作ろうか」とかね。

森田委員：

もう顔が「やりたい」って言っている。農政課へ行って、何かこういう本、どうでしょう。情報政策課に行ってセキュリティーの「こんなのはどうでしょう」とか。

森委員：

待ちの姿勢ではなくなるということだと思う。最初は心理的にも時間的にも大変だと思うが、できるところからやり始めると、変わってくるのではないかという感じはする。

ご発言いただいた職員のお話をうかがって、「変わりたいんだな」と思った。このままでいいと思っているわけではないというのが凄く伝わってきたので、報告書ができるまで変わらなくていいということはないと思う。

森田委員：

御用聞きに行くと、相手は絶対、違うものを出してくる。「こんな本、実は読んでいるんですけど」って言われて、こっちが驚くみたいなことがある。

森委員：

「知は現場にある」という話ですね。

森田委員：

そうです。

森委員：

「図書館で考えた課題解決の方法はこうだけど、現場はこんな風に出してきました」というようなやりとりがあるといいと思う。

そうすると、先ほど伊東委員長が言われたような多様なサービスの充実の核がいくつか作られ、そこに対応する資料も充実してくる、というような展開ができると思う。

森田委員：

困りごとなんて無限にある、人間ですから。みなさんの力は無限に使われ、役立っていく。

伊東委員長：

まさに今話していることが「図書館のあり方」。どういう図書館であればよいかということだが、普段は考えない。

図書館の悪い癖というか、本を揃えて待っていれば人が来るので。一応、それで成り立っていて、喜んでもらえる嬉しくなって「いい仕事してるんだ」みたいな錯覚に陥る。

吉成委員：

そうだよね。

伊東委員長：

ところがその後ろに「あんな所、俺には関係ねえや」と思っている人がドサツといることは全く見ようとしな。これは日本中にある話で、変わるための何かのきっかけは大事。

私たちがそのきっかけになるかどうかは分からないが、市長さんが変わって少し風が吹いたことは間違いないだろうという気はしています。

森田委員：

さっき図書館近くの食堂で食事して、「図書館、使いますか」と聞いたら、「使わない」って。「どうして」って聞くと「家に本がいっぱいある」と言う。

要するに図書館はもう古くて、そういう本しかないと思われている。そこを見せないと「ちょっと、こんな面白い本があるんだ」みたいな。

伊東委員長：

ちょっとよだれが出そうな金額の予算がついているにもかかわらず、アンケートの中に「欲しい本がない」という声が多くあった。どういうズレなのか、ちょっと分析の必要があると思わないか。

塩尻の図書館に僕がいたときは、ここの半分以下の予算しかなかったけれど、そういうことは聞かなかった。松本の予算でそれが出るということは・・・。

森田委員：

滋賀県の愛知川（エチガワ）って図書館が有名。中川卓美さんていう非常に有名な方がいらっしやって、本を間引いた。本を間引いた結果「本がたくさん増えましたね」って言われたっていう有名な話がありますけど、本が多けりゃいいものではないということ、1点1点に気づかない。

僕の感覚だと、開架が20万冊以上だと、もう多いです。多くても15万冊から20万冊くらいの間に収めないと、けっこう洪水になってしまう。

菊地委員：

滋賀のなんて図書館ですか？

森田委員：

愛知川。愛知って書いてエチ。

ここは、サイン、見出しがすごく有名。例えば、行政が読むべき本に「行政の達人」とか見出しがあったり、洋服なんかも含めて「着ること」とか、すごく分かりやすい。見出しがいい。

吉成委員：

愛知川のやり方って、経験の長い司書さんだったら知ってるんじゃないかな。

森田委員：

当時8人の司書のうち4人が学芸員の資格も持っていて、本の置き方もすごく秀逸だった。こういう古い椅子にブックエンドを使って、ティーンズとかをバーンと展示するとか、そういうことをやっていた。

その年の亡くなった人たちの本を「ありがとう、さようなら」みたいなことを追啓して置いてある。よくやる手法ではあるが、そのさり気なさが「うう、素敵・・・」みたいになる。

**吉成委員：**

そういうお話を聞かせていただいて、やっぱり一番、そうだなと思うのは、図書館を使っていない人がたくさんいるだろうということ。その人たちにもっと利用してほしいといったこと。

あとは、市の政策と関係あるのかなのか。関連づけできるとしたらどこでつけるのかっていう辺りの、その2つは非常に大きな、それによっても図書館の形が変わってくるくらい大きい考え方じゃないかなと思う。そういう考え方がみなさんのなかに共有されていれば、それをベースに考えていくっていう話になると思う。

**伊東委員長：**

市の政策という意味では、センターは取れないのが図書館。やはり、脇本陣のようなところになっている。ただ、そこに甘んじている傾向が強くて、政策に加わろうとはしないという傾向は、やはりあると思う。前回、「市の総合計画を作るのに図書館が入っているところは全国的に少ない」ということを言ったのはそういうところですよ。それは、売り込みはもちろん大事だけれど、やはり、やることをやっていないければ、「図書館は外せないね」という話にならない。

**吉成委員：**

そうですね。それ。

**伊東委員長：**

日頃の活動のなかでやっていないと、総合計画云々のときに慌てて「図書館、入れてよ」なんて言っても無理な話。「地域のなかにナントカ・・・」みたいなフレーズがあるなら、「地域のために図書館は何ができるだろう」というようなことをいつも考え続けていないと仕事は生まれにくいし、メニューも生まれないので、それをがんばっていく。

もうひとつ、いかにPR、発信していくかということがセットになることによって、行政の担当者、財政畑の人なんか「おい、また図書館が出た。図書館、出た」って注目するようになるみたいな話。貸し出しが増えたとか、そんなのは「まあ、がんばってるな」というだけの話だけれど、「図書館でこんなことした」という話が出て、「図書館の人間、あんな所に行って、そんなことやってるの？」というようなことの方が、よほどインパクトがある。

「図書館って、そういうことなんですよ」というような意識改革を、周りを含めてやっていかないと。図書館職員はそれをやっていない。やはり、「出る」ということがないし、そもそも意識が外に行っていないので、さっき言った、中での完結。本を揃えて待っていれば、人が来てくれるので、そこで完結しちゃうってところがある。

どういう図書館であるべきかという組み立てをしっかりと文書化して、お互い話し合っ、作っていくということがとても大事なだろうと思う。せっかくワークショップでこんなにたくさん項目が上がっているのに、1個1個についてメニューを作っていけば、相当なことになる。何がしかのものをそういうところでやっているって、とても大事だと思う。

**伊東委員長：**

先ほど、愛知川の話が出たが、あれは見せ方とか、いろいろな面で書店に図書館が近づこうとしていることの現れ。昔の図書館にはありきたりのイメージがあった。

森田委員が言われたように、滋賀県では面出しがすごかった。うちの図書館のスタート時は、「本の量イコール知識の量」というような感覚があって、それでいこうと思ったものの、伸び悩んだ。利用が伸びない。何かが違うかと思って、1泊2日で滋賀県をぐるぐる回って愛知川

にも行った。やはり、並べ方とか、見せ方がすごく「これをやらなきゃ駄目なんだ」と思った。だた、面出しすると、すぐに借りられてしまうので、そこが空いてしまう。

菊地委員：

そうですね。

伊東委員長：

だから、そういう図書館のあり方に切り替えようとして、かなりの本を書庫に移した。

菊地委員：

ああ、なるほど。

伊東委員長：

今まで50冊あった所に3冊しかなかった。いっぱい下げて、泣く泣くみたいな感じで下げて展示した。それをやるからには、ひっきりなしにそこへ行って、空いた所へすぐに補充しなければダメ。「やりっ放しにするのなら、これはやらない」と申し合わせてやったが、やはり稼働数が上がったということがあった。

菊地委員：

先ほどの「本、少ないはずなのに、多いですね」と言われたという話は、まさにうちの店を思い出しながら聞いていた。栗日の蔵書数は200冊くらい。それでも空間に立ったときに「本、たくさんあるな。この空間」と、思わせるのがディスプレイの妙。

多分、気づく人は、栗日の棚を見ていくと、こっちからこっちにこういう流れの、グラデーションなんだというのが分かると思う。「ここから写真で、ここから旅なんだね」というように。そんな風に僕の意図を辿ってくれるようにディスプレイしていくのは、書店の方が得意とするところなのだろうと、今のお話をうかがって思った。

森田委員：

武蔵野プレイスの別置を考えたとき、ジュンク堂池袋本店で800枚以上、写真を撮らせてもらって、司書さんと2人で解析していった。やはり、流れがある。棚ごとに管理されているので、ひと棚で完結しているものの、すごくいい流れがあった。他の書店にも数多く行けば、流れがあることは分かるはず。そういうものを知ったうえで、「でも、NDC（※日本十進分類法。図書館で一般的に使われている分類。）は使う」というふうにやっていくことはできる。

吉成委員：

ちょっと違うところから。

この間も館内を見せていただいて思ったことだが、幼児とか、読み聞かせというところでは人も来ているし、その辺りでサービスが行われていると思うが、中高生とか青少年になると、なんというか、印象がない。子どもが幼児からずっと育っていくところに、市立の図書館がどういふふうに、子どもの豊かな育ちをフォローしていくのか。

図書館の中だけではなく、学校もそうだし、いろいろな所との関連も出てくるので、市役所の課に飛び込んでいくのと同じように学校や保育園、いろいろな所に飛び込んでいかないと見えてこないものがたくさんある。そういう所に出ていくと、「図書館はこんな所にまで出てくるのか」みたいなことで記事にもなりやすいし、子どもたちもすごく喜んでくれるということもあるのだ

が、その辺りもどう考えていくのかというのが余りにも弱い気がした。そこはもう捨ててしまうのかよく分からないが、「でも、捨てられないよね。市立図書館だから」ということはあるだろうと思う。

**森田委員：**

塩尻市さんもそうですけど、場づくりなんです。先ほど森委員もおっしゃいましたが、場づくりで、まず本を選んで置くということは結構密接なこと。そこが一緒になっていないと。

**菊地委員：**

森田委員の御用聞きのお話から、少し具体的なアイデアが沸いたので、お話ししたい。

**伊東委員長：**

はい、どうぞ。

**菊地委員：**

先ほどの公民館の話で、御用聞きに行く先を公民館にするのはすごくいいと思っている。実際、市内35地区の全てに公民館があり、地域づくりセンターも同じようにある。先ほど伊東委員長が言われたように、合併を繰り返して大きくなっている市なので、地域ごとによってニーズが違うはず。

全ての公民館、地域づくりセンターに「どんなことを知りたいですかとか、勉強したいですか」とか、そういうヒアリングをすると、それぞれの地区の特性を反映したニーズを拾えると思う。それに対しては、10ある分館について「こここの地区なら、これが最寄りの分館」というのをみなさんにマッピングしていただいて、地区ごとに担当する分館を決める。それぞれの分館からそれぞれの地区の公民館へ御用聞きに行くとなると、10の分館全てを巻き込みながら、この中央図書館だけの仕事じゃなくて、11館のネットワークを持つ図書館の仕事として全体が関わっていくことができると思う。

ニーズが違うところにそれぞれの分館が、自分たちの持っている蔵書と、場合によっては中央図書館と連携しながらレスポンスしていくということをやると、まさにその図書館と、公民館という拠点を活かしながら地域との連携というところで、ひとつアプローチできるのではないかと思った。

これは、市長さんが今言っている、「どの地域も取り残さない。誰も取りこぼさない」という公約や、これに対して、まさにその行政がやりたいことに対して、図書館という、本を武器として持っている行政サービスが公民館と連携しながら、市民にアプローチするという、市政のなかで図書館所管として参画するということまで含めてできるのではないか。

ここで気になったのは、公民館と図書館の利用者の年齢層。基本的に高齢者、高い年齢層に偏っているという現状が、特に公民館はあると思う。そこだけだと青少年に対するアプローチは難しいだろうが、それは学校に行けばいいことだと、吉成委員の話聞いて思った。地域にも中学校とか高校とかに対しても御用聞きをする。もちろん学校図書館との兼ね合いがあるが、「市の図書館に来るとこんな本もあるよ」と、高校生に見せてあげて、「こういう本は学校の図書館にはないけど、市の図書館にあるなら行ってみようか」というようなことになって、来てもらったときに大事なのが、場づくりができていくかどうか。「これだったら来る価値あるな」と中高生が思えば通い始めてくれるのではないか。

**吉成委員：**

うん。

菊地委員：

その辺りはもう、森田委員がおっしゃるとおり、待ったなしで明日からでもやればよいと思う。

森田委員：

ちょっと気になるのは、公民館には日頃、人がいないので、仕掛けが必要ということ。

「何かやりますよ」ってやらないと人が来ないので、そこだけは・・・。

菊地委員：

そうですね。

伊東委員長：

地域の拠点という意味では、公民館、地域づくりセンターが一番わかりやすい区分になると思うが、公民館のもうひとつの弱点は、サークル活動を基本にしているのもので、その関係者しか来ないということ。やはり人が限られる。

しかし、それはどこも同じ話。図書館も「今、ここの仕事って図書館に来る人しか相手にしてないので、やっぱりそれ破りたい」という話と同じなので、いいと思う。公民館なら公民館、学校なら学校、その他にも・・・というように、外へ直に出かけること、物理的な外へもあるし、アンテナを外へ張るということもある。外と何かする、繋がるというのは、これからのあり方のひとつとして、前回から大分話が出ているという気はする。

裏返せば、できてなかったのかな、要するに「すぐやろうよ」の話で言えば、ヒントはそこにかなりたくさんありそうだと今この話を聞いていて思った。

森田委員：

御用聞き姿勢は、「教えてください」って行く。「私たちその分野のことは何も知らないの、教えてください」って・・・。

伊東委員長：

そうそう。塩尻でやったときに「タッグ組みましょうよ」的なアプローチをしてしまった。それはダメ。「一緒に事業やりましょう」とかは絶対ダメ。向こうも忙しくて。

森田委員：

ダメです。「全然、知りません」って言って、「そんなことも知らないの」って言って、そこから始まる。「連携」って言葉を使った途端・・・。それは失敗。

伊東委員長：

そう。そういう失敗が山のようにあるから、同じ轍を踏むことはない。

森委員：

若い方が出て行った方がいいかもしれない。

森田委員：

「何も知りません・・・」って言って。

森委員：

資料5で「知る・学びを支える」が、全体として1位2位を合わせると65%だが、「誰でも、みんなの」が17%ある。それは多分、「館に来てくれる」という意味合いもあれば、誰でもみんな

な、あらゆる世代の人、それぞれのニーズに資するという部分でもあてはまることだと思うので、数字には差があるが、2番目のこれを実質化していくのをすぐにでもやれば、1番目が実質化すると思う。「知る・学ぶ」って一体、何？」ということに「誰が知りたいの?」「誰が学びたいの?」「どういう風に?」というところを・・・。

やはり3の「誰でも、みんなの」があってこそ。そういう関連付けをしながらやっていければ・・・。職員はそれぞれ仕事を抱えていて、御用聞きに出かける時間があるのかとか、そういう不安が出てくるのがとてもよくわかるが、松本市中央図書館を構成する11館が全部一緒にやれるというのは、ここの中央図書館だけ頑張るんじゃないというのは、すごくいいことだと思った。

**伊東委員長：**

はい。

**菊地委員：**

だから分館の職員たちにとっても自分たちごととして取り組める、トライできる仕事を考えるという方がいいと思う。

**伊東委員長：**

数字は何でも語るの、ちょっと皮肉な見方をすると、これを見たとき、「知る・学びを支える」は、今の図書館のことを評価している数字に思えた。

だから、今の図書館の方で一生懸命にやっている仕事。一生懸命にやっているからこそ大事だし、パーセンテージが高い。しかし、「もっと何とかしたい」という気持ち、誰でもみんなに現れているのに、具体的なものがない。「ない」と言い切るのは、(2)に数字が上がってこないから。

**吉成委員：**

うん。うん。

**森委員：**

ああ、そう。ここが。

**伊東委員長：**

そこがしっかり意識されるようになればいいと思う。日頃、図書館に来ない大人が圧倒的に多いが、その層へのサービスはどこもできてない。しかし、そこを取り込まなければ利用者数が増えるわけがない。「まだまだやれるところだろうな、ここは。」というゾーンの数字が3.8%になっている、というのが、私のちょっとひねくれた読み方。

**森委員：**

1番と2番という表現は違うが、みなさんはどう区別しているのか。

**伊東委員長：**

1番に含むべき。含まれてしまっている。

**森委員：**

うん。

**伊東委員長：**

まだこうやって、取り出さなきゃいけないのが、今の日本の感覚。本当は「知る・学び支える」が

仕事の全てだよ、ということで済んでしまうはずなのに。本当は読書活動のことしか言っていない。

森委員：

資料4で細かい分析をしていただいたところを見て、「多様なサービスの充実」のところって、網掛けしてあるのは1個しかなくて、「いろんな世代」って出てくるので「おっ！」と思ったら、「読書の普及かぁ・・・」と、ちょっと思った。読書の普及はもちろん大事だが、このなかで唯一の網掛け箇所がそれなのか、という気はした。

伊東委員長：

では、一旦ここで休憩にいたします。

===== 休憩 =====

伊東委員長：

ここからは「次回に向けて」を、私なりに叩き台を作ってみたので、説明させていただきたい

1 確定事項

検討期間は、2月まで。時間はあるが今日で2回目なので、残りは4回ということ。

2 議論の目的

松本市中央図書館というのは、市内の11館、全体を指している。当委員会での議論は、松本市中央図書館が松本市民に必要で欠かせないサービスを提供して、安心して利用できる公共施設となるように、長短期的な将来のあり方について今後の方向性を示すことを目的としている。

3 委員会が行う議論の前提

(1) ゴール

年度末を目途に委員会名の報告書を完成させることが、ゴールになる。

どうやって、どう発表するのかということは今後、検討することになるが、この報告書は私たちの責任でつくることになる。

(2) 背景と議論の内容

- ・ 次年度以降、図書館サービス基本計画及び中央図書館大規模改修計画が作成される。
- ・ 両計画の実施計画策定は松本市が行うものであり、委員会が行うものではない。
- ・ 両計画を見据えて、具体的な検討項目が松本市から示されることが考えられる。
- ・ 両計画を見据える以上、図書館のあり方全般を可能な限り網羅したものとしたい。

図書館サービス計画を作るということが元々あったが、前回、この計画を作りたいという意思表示があったこと、また、この中央図書館の大規模改修計画があるということを明示したもの。当委員会が大規模改修計画をどうしようということではないが、提案はしてもいいだろうと考えている。

この2つの計画があるので、「サービス」はソフト面、ハード面の両方を指している。計画を進めるにあたって心配事項については、事務局から具体的に示していただいて、私たちに検討していく。そして、図書館のあり方を考えるということだが、これはソフト面のサービス計画であって、ハード面の計画を立てるものではないということ。ハード計画は議論の終盤で、「この内容をこの場所でやるのなら、10階建にした方がいいのではないか」等々の提案も出てくるのではないかと思うが、ハード面についてはあくまで夢の

提案ということにはなるだろう、それらを4行でまとめた。

### (3) 議論のテーマ

- ・ 目指す図書館像について
- ・ 図書館システムのあり方について
- ・ 基本的な図書館サービスのあり方、目指したいサービス水準について
- ・ 発展的な図書館サービスのあり方、目指したいサービス水準について
- ・ 職員（人）、組織、資料のあり方、目指したい水準について
- ・ 目指すサービス水準を生かす施設・設備のあり方について
- ・ 報告書案について

「議論のテーマ」は具体的な議論の内容をまとめたもの。

ひとつは図書館のあり方。「目指す図書館像」という言葉を使ったが、「こんな図書館でありたい、あるべきだ」というような議論をひとつはしていく。

次の「図書館システムのあり方について」は、本館と分館の全体のことを指している。

「基本的な図書館サービスのあり方、目指したいサービス水準」は、合併した村で図書館がないところをどうするとか、「それでも図書室はある」という話も含めて、全体の「取りこぼしが無い」ということを図書館としてはどうしていくのかという視点で図書館システムを考えるということ。

その次の「発展的サービス」は、松本市がこれまでやってきたサービス、また、いわゆる「ザ・図書館」的なサービスへの上乗せになる応用編という部分、職員のワークショップの集計では上がってこなかった子育て支援、ビジネス支援、デジタル情報サービスといったものがここに入ってくる。こうした項目についても突っ込んだ議論が必要だと考えている。以下、職員、組織。組織については民間委託のような話も必要であればしていくことにもなるかと思う。施設・設備については、市民アンケートで駐車場のこと、施設の老朽化等々が出ていますので、一定の方向づけが必要であろうと思う。

最後の「報告書案」については、次回以降、会議を持つにあたって具体的に示されていく報告書に私たちが目を通して、必要な指摘をしていくことになると思う。最後には私たちの名前を入れるので、その責任は持たなければならないので、項目に挙げている。

以上、たたき台として示させていただいたが、基本的にはあと4回で(3)の「議論のテーマ」を4つ分けていこうというのが進行をしていく私の立場になる。

**森田委員：**

「機運を高める」ということを大事にしたい。

市民の、より多くの人の機運を高めるためのアウトプットにしたい。

**伊東委員長：**

報告書をそれに使う？

**森田委員：**

報告書という形ではなく、みんなが見て、「あ、図書館、変わろうとしているね」と思えるものを出していきたい。チラシなりポスターなり、そういうアウトプットを作ることに注力しないと市民に伝わらないのではないのか。ここでは、どうやったら機運が高まるのかということをしつかり形にしていきたい。「取りこぼさない」というのは、やはり本が好きな人だけじゃないところ



みたいになるかもしれない。形に残しておけば。

**菊地委員：**

僕も折衷案的な方向を提案したい。

やはり委員会の議論は、次年度以降の図書館サービス計画ないし、中央図書館の改修というところも見据えながら進んでいくというところだと思う。この委員会で起こったことをまとめた成果物というものは、次年度以降、なにがしかの仕掛けをしていくうえでもあった方がよい。伊東委員長がまとめられたたたき台のなかの論点をひとつおとり議論し、森委員がいわれたように事務局側に報告書という形でまとめていただくのがよいと思う。

報告書というものはおそらく、多くの市民の意識にとまるものではないだろうが、そこに甘んじることなく、マスメディアであるとかSNSを使うとかして発信しながら「図書館って何か動こうとしている？」とうムードを作っていくということもやっていく必要がある。それはやはり実践活動の部分で、委員会の議論と並走して「街場」にこの熱量が伝わる方法を考えて仕掛けていく。報告と実践の両方やるというのは欲張りかもしれないが、どちらもやる必要があると思う。

**森委員：**

こういう委員会を「見える化」するにはメディアの方に会議に入っていて記事にするという方法がとられているが、当委員会ではそれをしないかわりに、こちらから発信していく。

これは、ワクワクしながらやっていけそうです。

**伊東委員長：**

「やりましょうか」と言ったものやっつけていけばいいと私は思う。その労をスタートさせる時がやはり大変なので、「それをとにかくやるぞ」という気持ちを共有していただいて、ひと月かけて1個でいいから、その1個動かして、それを発信する。次のひと月かけてもう2個目をやるというふうにやっていく。「私たち、検討委員会の報告を待っているつもりはないんです。」というスタンスでいいと思う。そして、「できるところから私たちはやってきます。」という発信と合わせて、それを基本としながらやっていけばいいと思う。やはり、それがなくなるときついと思う。

「地域づくりだよな。」とか、そういう話をいくら書いてみても、なんの説得力も持たないので、「具体的にこんなことしてます。」という発信をする。今までと違って始めたぞっていう感覚が、ずっと流れ込んでいくというのはとても大事だと思う。

**瀧澤館長：**

今までのお話をきいて、「最後は職員の意識だな」と思った。現在は、先日のアンケートからすぐに変えられることについて話し合っているところ。

選書に関して何を変えていけるのかということから始めているが、職員が外に出ていくというところは、まだ踏み込めていない部分ではある。中の今できることについて動いており、それを表すことはできていると思う。

**菊地委員：**

不十分なことに対する改善は、みなさんで取り組んでいただくことだが、我々にできることは、外に出ていくという実践についてのこと。その実践をするのは職員のみなさんだが、それをアウトプットするということは、委員会も職員も全員で取り組むということができてくるといいと思う。

これからの図書館の青写真を描くことは当然のこととしてやる。そこには青写真のピースがい

くつもあるので、「こういうことを実践していくと、この青写真に繋がります。」と、その青写真が全体のどの部分になるのかということも考えて発信する。ピースの実践はもちろん、職員のみなさんにやっていただいて、そのレポートを「街場」に伝えていくにはどうすればいいかということは、みんなで一緒に考える。

**森田委員：**

ホワイトボードはありますか。

(以下、ホワイトボードを使って、チラシのレイアウト、記事の入れ方を話し合いながら、実際の形に仕上げている手法を説明。委員が記事の内容、キャッチコピー等のアイデアを出し合った。)

**伊東委員長：**

チラシを置くところ考えると、図書館利用者がいる所ってことになりそうな気がするので、その範囲もだんだんと増やしていく。やはりアウトプットは大事なので、来年以降のたたき台というか、礎になるものをね、作るのは僕らの委嘱の理由なのだろうが、報告書というものには、作ったものの眠ってしまうという可能性もある。そうでないものを作っていくためには、今から動き出すというのはとても大事だと思う。

委員からいろいろな話が出ているが、やれることからやっていただきたい。「なんかあれやらないとやばそう・・・」とかいう感覚は持たなくていいので、「今、やってることをちょっとひねると、あれができるな」というようにピンとくるものがあることもある。それを出していくのも広報のうち。

図書館を使っていない人にとっては、図書館から知らせるべきことはいくらでもある。

**吉成委員：**

お金をかけないでやるということがいいと思う。メディアコスモスは、本当に手弁当でやっている。

**伊東委員長：**

降ってわいたような話ではあるが、10月には出さないと次の会議がきってしまう。

**瀧澤館長：**

1回目、2回目を合わせたものを作るのか？

**伊東委員長：**

委員会報告ではないので、それに縛られなくてもよいと思う。

**瀧澤館長：**

まずは「始まりました」ということを発信するものを作る。

**菊地委員：**

図書館からの発信として図書館に貼りだすだけだと、既存の利用者の目にしかとまらないことになってしまうので、できたら100部預けていただければ、「街場」の20か所くらいで、仲間に配ってもらえる。そういうふうにしてフリーペーパーを配り始めたということをニュースにするという流れを作る。プレスリリースをして「図書館が作ったフリーペーパーをまちで配り始めたので、取材してください」と言って取材してもらえばいい。

**伊東委員長：**

話をしていると、こういうことも思いつくことができる。

何かの機会にフッと立ち寄って、「こんなこと思いついたけど、できるかしら」という話に行く。これが外に出る第一歩。それなのに、メールで済ませたり、「でも、失礼だからやめておこう・・・」とか終わってしまうから、外に出ることができないままにいる。

**菊地委員：**

うちは喫茶店なので、誰でもいつでも来てもらっていい。

**伊東委員長：**

はじめの一步が出るまですごく大変だが、出せば発想が湧き上がってくる。そのうちに何か一緒にやろうという話になれば、人間関係ができているから、やりやすくなる。まずはスタート。スタートすれば動き出して、セカンド、サードと、ギアが上がっていく。とはいえ、委員会から「やってください」と言うのも変な話なので、事務局でご検討いただきたい。

議論については、報告書が最終的にどれくらいのボリュームになるのか、現時点では分からないが、事務局でまとめてもらえるということなので、報告書づくりに向けた議論をしていくという前提でよいか。

**菊地委員：**

たたき台として挙げていただいたものを、僕としては議論のテーマはこの順序で、網羅していくということによいと思う。

**伊東委員長：**

目指す図書館像は大分、前回、今回の委員会での話から、大分見えているので、とりあえずやってみて進めていくという感じでよいか。

**菊地委員：**

目指す図書館像を序盤で言語化して、共通の言語としてこの空間で共有するっていうことを試みたらいいと思う。

**森田委員：**

図書館システムというのは、結構広いですね。

**菊地委員：**

場合によっては、そこを一旦脇に置いておいて、伊東委員長が言われる「基本的な図書館サービスのあり方」と「発展的な図書館サービスのあり方」のところ、その次の「職員、組織、資料のあり方」という3項目について議論した先に「松本市の図書館システムとしては、こういうやり方が考えられるのではないか」というまとめの2番目の項目に立ち返るといいかもしれない。

**森田委員：**

基本的にこれから人口は減るし税収が減るので増やすリソースはない。何か新しいことやろうとすると、今までやってきたことを諦めることになる。スタッフにはそれを考えてほしいと言っている。

新しいことをしようという代わりに、「サボる」というといただけないが、市民ひとりひとりに

委ねることのできるものを探してもらおう。「発展的なサービス」はプラス要因になるので、基本的なサービスでやらなくてもいいものを探すということをやらないといけない。それは優先順位をつけるということに他ならないが、難しいこと。しかし、本当に優先順位をつけないと救えるものも救えなくなってしまう。これをどうするか。

**伊東委員長：**

三つ目と四つ目のポツ、実は僕はどういう議論にしたらいいのか、イメージが沸かない。というのは、あり過ぎるから。例えば、障害者サービスはどうあるべきかみたいな話を始めてしまうと、増えた外国人をどうする、子どもをどうする、高齢者をどうする、というように、どんどん広がってしまう。現実的にスタッフの人数が決まっている状況で、新たなサービスをやっていくとしたら、サービスを整理する必要があるという方向付けをそこでしておく必要があるかもしれないし、「職員を増やせ」というフレーズが出てくるかもしれない。

**森委員：**

県立図書館は第2線のサービスなので、第1線のサービスはしないのかという議論があるが、市町村図書館と一緒に第1線の直接サービスを考えていくためには、それを全くやらないというわけにはいかないだろうと思う。それでも、県立図書館が、障がい者、子ども、高齢者等々、ひとつひとつ項目を立てたサービスをやっていくことはできないので、今まで図書館を使いにくかった人向け、遠隔地を含めて物理的に図書館の建物に来るのが難しかった人向け、重い本を手にとって読むことが難しかった人向け、というふうに大括りにしようという話を今している。

当委員会での議論も、あまり細かい項目にせず、大きく捉えてはどうか。先ほど新しいサービス相手という話が出たが、私たちは消費サービスを提供するだけではないので、あるサービスの担い手は図書館員ではないのかもしれない。担い手をどう巻き込んでいくかという話でもあるので、パートナーとしての市民ということを考えてもいいのではないか。今まで図書館が使いづらかった人向けのソリューションのひとつとして、電子ブック、デジタルを結びつきたいという思惑もあるのだが。

**菊地委員：**

おそらく市長の思いとしても最初の会議で部長のあいさつで言われたとおり、ダイナミックな意見の発端をという部分で「松本市が目指す図書館の青写真はこうです！」と、ドンとしたものが欲しいという話だと思う。その機運を高めるという意味においても、「こういう図書館だったら行ってみたい」とか「ワクワクする」なんていう高揚感のようなものを市民に持ってもらえるような青写真を出してほしいという話だと思うので、そこには個別具体的な事項それぞれへの解答というものまでは必要ないのではないか。

**吉成委員：**

個別具体的なものというのは、図書館関係者にしか分からないし、役所の中の人でもわからない。

**菊地委員：**

だから、ひとりひとりの市民が青写真を示されたときにワクワクするということに必要なものは何か、ということに論点の焦点を絞っていけばいいのだろうか。

**伊東委員長：**

次回、たたき台でいいので、報告書の骨格というか、章立てを事務局から出してもらえないか。「発展的なサービス」などという言葉よりも、もっといい言葉にしてほしいが、もっとやっていきたいことを羅列して箇条書きにしておくというような、他の章立てよりは一步進んだくらいのところまでのものを出してもらって、もう少し具体的に今の議論に数値的なものを加えて話をしていければいいと思う。

報告書は大変だし、ニューズレター、チラシの宿題も出ているのでいろいろと大変だと思うが、進むべき方向性が見えてきた。

**瀧澤館長：**

本当にこの状況を「生かすも殺すも職員次第」という気がしています。

**森田委員：**

目指すということでもいいのだが、共感共鳴するポイントというのは「役に立つ」ということでも使えるし、どういう人がどういうポイントで図書館と共鳴するかという、それだけでもいいような気がする。それが評価指標にもなるし、やはり「目指す」というのは結構難しくて、共感共鳴ポイントをみんなで集める。集めた後は整理できるので、まずはある人物像を思い描いて、その人が共感共鳴するポイントを探すというような、いろいろな手法を使ってポイントを集めてみる。文学が好きな人も当然いて、いろいろな人がいるので、全部網羅することはできない可能性があるにしても、揃ってくると「これだ！」という平面が見えてくる。

**伊東委員長：**

今の「役立とう」というのは僕がよく使うフレーズだが、それを言うためには、やはり具体的なものが欲しくなるが、子育て世代に「こんなサービスの図書館ができるんですよ」と言ってしまうと、それは子育て支援サービスを語ることになってしまう。個別のことをあまり欲しいと言っていると進まなくなるが、それを言わなければ伝わらない。「子育てに役立ちます」なんてことは役に立たない。

子育て世代にどう役立つのか。魚屋さんに図書館がどう役立つのかということをやっと語らないから「ビジネス支援」なんて言葉が宙に浮いてしまう。図書館が魚屋さんにどう役立っているのか、図書館員が何をしているのかを他の図書館の事例を引いてきてもいいかもしれないが、そんなことも挙げてみる。そういうことを全部網羅しようとするは大変だが、特に、今までやっていなかったようなことをきちんと見せる。本当は、それを10月か11月にやってみて、ニューズレターにすると現実と報告書がくっついてきていいのだが。

しかし、最初からそれをやるのは無理なので、これは温めながら、今後やってもらおう。ちょっと具体的なことを挙げながら進めたい。

**森委員：**

具体例はあった方がいいと思う。さっきの森田委員の話も出てきた、こういう人、こういう私、読んだときに「これ私のことだ」って思える何か。具体例があった方が、いいと思う。

その具体例のあり方としては、市長さんが公約に挙げているキーワードを使うっていうのはわかりやすいやり方なのではないか。それよりも、図書館から沸き起こってくる「こういう人」というのがあれば、それでもいい。

森田委員：

ポイントをいくつか挙げればいいのかは難しい。共感するポイントをいくつか挙げれば「そうだね」ということになるのか。

菊地委員：

それに対する返答になるかわからないが、ひとつのポイントは、松本の人は「学都」という言葉に対して誇りを持っているということ。「うちは「学都」だから」というのがある。でも、「学びの都」と書いてある。信州大学があるから成立しているまちなのかというと、まだまだ課題がある。大学とまちの結びつきはこれからの課題。では、何をもって松本を学都と言えるのかというと、旧開智学校にまでさかのぼってくる。

今現在、「これがあるから松本は、学都なんだ」と言えるシンボルがやはり欲しいというところは、松本市民の潜在的な課題意識としてみんなが持っている、みんなが学都を自慢したい。

そうだとしたら、学都のシンボルとなるような図書館というものがあったら、市民にとってすごく共鳴共感するポイントになる。

吉成委員：

そうだよね。

菊地委員：

「この図書館があるじゃない」、「学都だね」、「この図書館ネットワークサービスがあるじゃない」「それ、学都だよ」と。市民が胸を張って学都と名乗れるシンボルとしての図書館。「中央図書館はもちろんだし、分館とのネットワークを生かしたサービスをこれから作っていくんですよ」というのは、かなり多くの市民の共感を得ることができると思う。

吉成委員：

バックキャストだね。「こういうものが欲しいね」という。

菊地委員：

はい。

市民12年目にして思うことだが、多分このまちの人たちは、「教育とか学びとかっていうことをずっとやってきたまちだよ、うちは。」っていうところに対するシビックプライドがものすごく高い。

吉成委員：

なるほど。

菊地委員：

僕もいわゆる移住組だが、結局、そこに対して共感共鳴している人たちが松本に移住しているという感じがすごくある。

文化度というか、そういう気品みたいなところなのか、そこに共感した人たちが松本に来る。例えば自然がある環境で子育てをしたいというなら長野県内どこでもできるのに、松本市を選ぶ人たちは文化度だったり、文化度のベースにある学都的な気風みたいな気分とか雰囲気みたいなところに心惹かれてこのまちを選んでる。

だから、もともとの住人はもとより移住組に対しても、何をもって自分たちが学都と言えるのかというシンボルとしての拠り所が図書館だというのは、きっとすごく強いと思う。

森委員：

ずっと地元でこられた方と新たに入ってこられた方を結ぶ、共有できるシンボルということですね。

菊地委員：

そう。

吉成委員：

さっき、旧開智学校の話が出たが、旧開智学校の資料編纂室がこの中央図書館に入っていて、その中の資料に学校の毎日の日誌や教科書があると前県立図書館長の平賀さんから聞いた。それはルーツだから、ルーツが分かれば、「今はこういう風に、それを学都と呼んでいます」って言い換えができるので、図書館の中にそれが入っているのは強みだ。

伊東委員長：

学都、岳都、楽都の3ガク都でもいいかもしれないけど、松本市民に訴えやすいし、私たちも柱を据えやすいので、報告書の背骨としていいかなと、みなさんの話を聞いていて思った。

菊地委員：

3ガク都はみんなが好きですが、「山ガク」は山があるとして、「音ガク」もサイトウキネンがあるからいいとしても、市民の意識からすると、「山ガク」の岳都は山があれば松本でなくても、どこでも言えるし、「音ガク」の楽都だって日本中を探せばサイトウキネンよりも分かりいいものはあるので、3ガク都構想は僕らみたいな新しい市民からすると、「あるものに寄りかかっているだけじゃん」という感覚がある。

シンボリックな既存のものに対して学びに活用できると言っているが、山の環境をどう生かすかというところに落とし込まないと「岳都」とは言えないし、松本のまちを歩けばそこかしこで生音楽が聞こえてくるという空気を作らなかつたら「楽都」とは本来言えないが、学びのガクでは「市民が日常から使える図書館サービスがあるから「学都」だよというのはリアリティーがある。

僕ら新しい市民からすると、今は絵に描いた餅でしかない3ガク都構想をいかにアップデートしていくかというのが全体的な課題意識ではあるが、図書館というところでもって、リアリティーのあるガク都にしていくというアクションは是非やりたい。

吉成委員：

前日も申し上げたが、やはり図書館の方針よりも、教育振興基本計画で規定されている言葉の方がよほどピンとくる。それを具体的に置き換えたら現実には何なのかという価値観も含めてリアリティーを持たせていくということをやっていないと・・・そこまで踏み込まざるを得ないのではないかと思う。

森田委員：

手元に2冊本を持っている。

菊地委員：

「それ何ですか？」と聞こうと思っていた。

森田委員：

1冊は、『人新世の「資本論」』。これは人が汚染や気候変動で世界を変えてしまう時代だということとを地層学で「人新世（ひとしんせい）」と名付けようといわれていて。そういう時代において、資

本主義もが変わらないといけないという話をこの著者が唱えている。すごく面白い。結局、最終的には脱成長コミュニズム、生きていく共同体を作っていくことになるだろうという考察をしている。

もう1冊は『「自分たち事」のデザイン』。著者は渡辺保史という方、2013年に亡くなってしまったので、遺稿をみんなで自費出版したもの。もう買えない。「自分たち事っていう風なものにしていかないと、全てが他人事になっていく世の中になっていく」ということをずっと構想して、書いている途中、たしか47歳で亡くなってしまった。この言葉はすごく大事だと思っている。どんなことも、電力だったり、食糧だったり、弱者支援だったり、みんな他人事に思ったら何も進まない。自分たち事に思わないと何も始まらないということ。

岳都もそう。「山は自分たち事で何なのか。自分と山は」。そこまでもっていかないと変わらない。それを考えていくのが図書館の持っている雰囲気。これは難しい。本が変えていくわけではないので。もちろん、図書館が持っている雰囲気が変えていく。

**伊東委員長：**

時間が大分過ぎて、とりあえず吐き出していただけただけでしょうか。

次回どんな資料でどうするかというのは、これからの検討になるが、次回までにニューズレターが出来上がっているといいな、ということはある。次回は1か月後の10月26日。

**森田委員：**

そのときまでにどこか御用聞きはできるか。あるいは午前中にセットしてもらえたら僕も一緒に行く。

**伊東委員長：**

今回の議論では図書館システムを飛ばして図書館サービスという切り口で、もう少しやりたい。テーマとしてはその辺りを取り上げていこうと思う。

事務局からの連絡等なければ、これで終了としたい。お疲れさまでした。

以上